

Flat character と round character :

キャラを演出する自己

高森 淳一

学生相談臨床 -京都文教大学学生相談室報告書- 第6号

2009年度 別刷

Flat character と round character：キャラを演出する自己

高森 淳一

生死の生をほっぽり出して
ねずみが一匹浮彫みたいに
往来のまんなかにもりあがっていた
まもなくねずみはひらたくなった
いろんな車輪が
すべて来ては
あいろんみたいにねずみをのした
ねずみはだんだんひらたくなった
ひらたくなるにしたがって
ねずみは
ねずみ一匹
ねずみでもなければ一匹でもなくなつて
その死の影すら消え果てた
ある日 往来に出て見ると
ひらたい物が一枚
陽にたたかれて反っていた

山之口貘 「ねずみ」

1. はじめに：キャラ

相手にどんなキャラで接したら良いのか分から
ないんです。

近年、来談した学生から、こういった訴えを聞く
ことがままある。知人や友人のなかで自分がどのよ
うに振舞ったら良いのか分からず困惑するという訴
えである。この悩みは、抽象化していえば、同世代
に対する対人緊張であって、そう考えれば昔から青
年期において見られたものとも言える。しかし、「キ
ャラ」という表現が興味深い。

キャラという用語が使用される背景には、相手に
どういった態度をとるのか、何を話題にするのかと
いう、態度・行動次元での困惑にとどまらない、ある
種の意識の存在を感じさせる。それは、その場に
おいて自分はどんな役柄を演じるべきかというロー

ル・プレイングの意識であり、行動選択の次元より
も、もう一段根深い自己規定にかかるものだ。

説明するまでもないが、キャラとはキャラクター
の略称である。また、クライエントのいうキャラク
ターとは心理学でいう性格ではなく、登場人物のこ
とだ。登場人物といつても小説よりも、アニメやT
Vゲーム、まさにロール・プレイング・ゲームとい
った範疇のキャラクターが念頭にあるようだ。

ここでは、近年の大学生におよそ通有すると思わ
れる、キャラを演じる自己意識、またキャラを演じ
ざるをえない友人関係のありようについて考察する。
その際、フォースター、E. M. の flat character と
round character の概念を援用しよう。青年の自己
構造は、round character というより flat character
の集合体として理解する方が実態に即しており、また
同世代集団にあっては相手を flat character にし
ようとする圧力が顕著であることを論じる。くわえて、
自己構造が flat character の集合体とならざる
を得ない社会的背景について考察する。

2. flat character と round character

flat character と round character とは、英國の小
説家、フォースター、E. M. が『小説の諸相』(1927)
のなかで提起した、小説の登場人物についての区分
である。

フォースターによれば、flat character、つまり平
面的人物とは、類型的・人物、戯画的・人物のことであ
り、ひとつの観念もしくは性質に近く、17世紀のイ
ギリスでは気質(humours)と呼ばれていたものだ。
心理学でいえば、類型論における純粋タイプという
ことになろう。

17世紀ならガレノスの体液による4気質(多血
質・粘液質・胆汁質・黒胆汁質)、現代ならば血液型
性格占いによる類型に従うような人物像だろう。

フォースターは、ディケンズの『ディヴィッド・

コパーフィールド』に登場するミコーバー婦人、ブルーストの『失われた時を求めて』のバルム大公夫人を具体例に挙げている。

日本の小説で補足すれば、漱石の『坊っちゃん』に登場する赤シャツ、野だいこ、うらなり、山嵐を思い浮かべればよい。

他方、round character、つまり立体的人物とは、単純な要約を許さない多面的な複雑さや人格的な深みをもち、登場するたびに何かしら新しい喜びを読者にもたらす。その人物が立体的人物として通用するか否かは、説得力をもって読者を驚かすことができるかどうかにかかっている。

実人生を厳しく見据える批評家が平面的人物を非難するのに対して、フォースターは、現実の人間は誰しも平面的人物のようではないという事実を認めつつも、小説ならば平面的人物が登場しても一向構わないし、複雑な小説では、立体的人物と平面的人物の双方が必要不可欠だという。

一般に、主人公が立体的人物、副人物が平面的人物である。むろん色々な小説がある。ディケンズの小説の登場人物は、ほとんどが平面的人物であるが、それでいて深みのある人物像を造形している。それが可能なのは、ディケンズの天才のなせる業だとフォースターは言う。そして、ディケンズのことを、完璧ではないけれども偉大な小説家と評する(ただ、平面的人物だけを駆使して成功した小説というのは、ディケンズを偉大な例外として、他にはあまりないように思える)。ドストエフスキイの小説に登場する人物は、すべて立体的人物だとフォースターは言う(すべてとは少々極端な気がしなくもない)。

小説のなかでは、立体的人物と平面的人物がおりなす綾や平面的人物が一時に立体化するさまに面白みがあるのだろうが、一応、図式的に言えば、主人公が立体的人物、副人物が平面的人物である。

この図式は、実生活における自然な認識に対応している。つまり中心に立つ自己は立体的人物で、他者は心理的に自分から遠ざかるにつれて平面的人物に近づく。読者は主人公に同一化するので、副人物が平面的人物であるのは、ある意味自然と言える。平面的人物についてフォースターの述べるところは、

小説論として、おおいに首肯できる。

しかしながら、小説ではなく現実世界でクライエントと出会う心理臨床家としては、平面的人物ということには別の思いを抱かざるを得ない。

むろん、フォースターは小説論を述べているのだから、お門違いの感想ということになるのは、重々承知している。しかし「詩と真実」、そのどちらの世界に力点を置くかによって、おのず認識も異なるだろう。

それで、どう思うかというと、フォースターがそれに対して反論する目的で引用しているノーマン・ダグラスの意見に近い。ダグラスは、人物を平面的人物として描くことを「小説家のタッチ」として批判している(邦訳 p.103)。

私に言わせれば、『小説家のタッチ』とは、普通の人間精神の深さと複雑さを表現できないものである。『小説家のタッチ』は、自分の文学的目的のために、ある人間の二、三の面だけを選び、ほかの面はすべて無視してしまう。たいていその人物のいちばん目立つ面、つまり、文学的のためにいちばん『役に立つ』面だけを選び、ほかはすべて無視してしまう。意識的に選ばれたその特徴に合致しないものはすべて除去されるし、除去されねばならない。そうしないと人物描写が完璧にならないからだ。この人物にはこれこれしかじかの特徴があり、この特徴と矛盾する要素はすべて廃棄処分にしなければならない。かくして『小説家のタッチ』は、しばしば論理的に間違った前提から議論を進めることになる。自分が気に入った面を採用し、ほかは捨ててしまうのだ。採用された事実そのものは正しいかもしれないが、あまりにも数が少なすぎる。作者が言つてることはウソではないかもしれないが、しかしけつして真実ではない。これが私の言う『小説家のタッチ』である。それは結局は、人間の真実を歪めるものである。

以下、フォースターの flat character と round character の術語を援用しつつ、青年の自己構造とそれを基盤とする対人関係の特質を論じよう。

3. flat character の集合体としての自己構造

① flat character の切換え

現代においては、心理的防衛機制として、抑圧よりも分裂（スプリッティング）が優勢であるように思われる。

境界性人格障害に専門家の耳目が集まり始めた頃は、スプリッティングというと、即、人格障礙という具合であったが、近年、世間一般において神経症的心性が影を潜め、正常といわれる人にも多かれ少なかれ人格障碍的心理がうかがわれ、ことに軽微なスプリッティングの使用は少なくない（スプリッティングという言葉が大仰というのであれば、大雑把にすぎると「割り切り」といってもよい）。これだけスプリッティングが遍在すれば、スプリッティングを以て人格障碍の指標とするわけにはゆかない。というかそれでは実践上、分類的意味をなさない。

こうした「一応」正常な範疇のスプリッティングとしては、たとえば、Aという友人といふ時は、その場にいないBの悪口を言い、他方、Bといふ時はAの悪口を平然と言う、といったものが挙げられる。そんなことなら、よくあることで容易に了解可能と言ふひともいるかもしれない。

では、こういう例はどうか。仲良しグループの一員に対して、自宅からはネット上で匿名やなりすましで誹謗中傷を繰り返す。その一方、学校で当該の友人と直接顔を合わせ、その被害を聞かされた際には、相手に深い同情を示して自分に違和感がない。自らの加害行為への意識は当座、脇に置かれ、仲の良い友人を心配する自分だけがいる。これは突飛と思われるかもしれないが、心の働きとしては先の例の延長線上に位置するだろう。

スプリッティングの活用が大規模かつ頻繁であれば、そのひとは一般とは区別される特異な人格構造の持ち主と判断されるだろう。しかし、スプリッティングが軽微ではあっても、近年の青年の自己構

造は、自我、超自我、エスの力動からなる round character と表象するよりも、時に応じて、ある flat character から他の flat character へと変移する flat character の集合体と見る方が、さまざまな現象を理解しやすいように思える。

場面ごとに態度が豹変するのは、表と裏、本音と建前として理解できなくもないが、建前は良く言えば外向き、悪く言えば偽的、本音は内向きあるいは真的という位相の違いがある。また、本音があるから建前をつくろい、建前を表に押したてるから裏の本音が温存されるという相互依存の関係にある。光が増せば影が濃くなると言い換えてよい。球体（round）に比して言えば、オモテは外表面、ウラは内部という位置づけになる。

しかし、個人内にある flat character どうしでは、出番に多寡はあっても、その存在はどれも仮でありつつもその時々において真であり、また相互のあいだにはあたかも民主主義的な平等が与えられているかのようだ。したがって眞の自己／偽の自己という区分自体が、あまり有効でない。

ひとつの一面的 flat character から他の flat character へと移ってゆくのは、現代社会において適応上、都合が良いからだろう。その都度、一面的であるがゆえに、この複雑な社会関係のなかにあっても、自己矛盾や葛藤に苦しめられることなく、その場に応じた行動力を遺憾なく発揮しうる。気持ちの切り替えがある範囲内で精神衛生に資することを鑑みれば、flat character の切り替えに効能のあることは見やすい道理だろう。

第三者が、ある程度の時間的幅をもって、そのひとを眺めた場合、発言や行動がてんでんバラバラで、矛盾どころではない一貫性の欠如を目の当たりにするとしても、本人の自己感覚では、それはそれ、これはこれ、あの時はあの時、今は今、以前とは状況が違うのだから言う事やる事も違っていて当然、という具合である。そこには自分にとって貫くべき主義や実現をめざすべき理想などは存在しない。

時間的、空間的一貫性を保持した古典的な自我同一性など、もはや青年は求めていないかのように見える。状況次第でその都度、適した役柄へとテンポ

よく軽やかに收まり流れに乗じてゆくことが大切で、自分を何かに限定する窮屈さより、つねに何にでも変身できるポテンシャルを好む。

ひとつの断片から他の断片へと移ってゆく、その転移は内的必然性に基づくというより、場に左右される。その際、自分が「何であるか」より、「何に見えるか」が重要である。そもそも、自分が何であるかという自己規定は、最初からあまり問題になっていないというべきかもしれない。したがって、本當は甲だけれど、それを乙に見せかけるという意識ではなく、乙に見えればそれは乙であるというだけのこと、という感覚だろう。

自己とは、自分が自分のことをどう思うかではなく、他者が自分をどう思うかで決まる。fictionalizing philosopher と自称していたディック、P.K. のSF小説、Impostor は興味深い。

主人公のオルハムは、自分になりましたヒューマノイド・ロボットと間違われてあやうく逮捕されかかる。ロボットは交戦中の外宇宙人が送り込んできたもので内部に爆弾が仕掛けられている。機転によって、辛くも虎口を脱した主人公が、自分は本物の自分であること、つまり自己のアイデンティティを証明しようと奔走することで、ストーリーは展開してゆく。しかし、最終的にオルハムは、自分は自分の思っていた自分ではなく、みなが言っていた通りの自分であった事実に直面させられる。そして外宇宙人の目論見通り、大爆発を起こす（この小説は1953年つまり半世紀以上前のものである。ディックの時代精神への先見性には驚かされる）。

社会における自己同一性は、自己による規定と他人からの規定が一致するところに成立するはずだが、昨今ではもっぱら後者に比重がある。プロタゴラスに倣って言えば、他者に映る自己こそが万物の尺度である。

セルフ・プロデュースという言葉が聞かれ、心理学専攻の学生が卒論のテーマに自己呈示を選択する所以である。『できコツ：“凡人”が“できるヤツ”と思い込まれる50の行動戦略』（2010、講談社）などという奇妙な表題の本が好評を博している事実に驚く。できる奴になるためのコツというのなら、昔

人間にも了解しやすいのだが。地力につけるための地道な努力なぞいちいちしていては、身が持たない、できるヤツに擬態する方が、偽装社会では費用対効果が高いということだろう。努力、根性、義理、人情など自己束縛になりかねない。

② キャラを演じる

虚像と実像とのあいだに位相的な差異が存在しない世界では、自己をある役柄として演出するという意識が存在する。実際、芸能人などは、ヘタレキャラだの何だと自分を売り込むのに都合の良い flat character を戦略的に選択しているようだ。素の自分を理解してもらおうなどとは考えていないだろう。俳優ならば演技が仕事だから、舞台以外のバラエティ番組でも歌番組でも何であれ出演中は、つねに演技をしていてなんら不思議はない。

しかし、芸能人ならばいざ知らず、一般の人々が日常生活においてキャラを演じようとするはどうであろうか。キャラが云々というクライエントの自己感覚においては、自分という地金があって、その地がだせない、本当の自分を理解してもらいたいというより、自分をひとにどう見せるか、ひとにどう見られるかという問題設定の方に比重がかかっている。

自己とは即的な特性を持たず、対的にその都度、構成されるかのようだ。恒存的実体や唯一の現実など疑わしく、淀みに浮かぶ泡沫のように種々の現実が生々流転してゆく、そんな世界では「見かけ」（鏡映自己）が正味そのものである。

虚と実の力関係が反転し、虚の方が実を突き動かすようになったというのではない。虚／実という区分自体が模糊となった。「見かけ」とは、けっして虚ではなく、大いなる作用をもたらす（wirken）する現実（Wirklichkeit）である。

総じて日常生活の全般が、演劇的というか芸能界的である。たとえば、初めての体験をいちいち何々デビューという。すなわち自己劇化である。「世界はすべてひとつの舞台。そしてひとは、男も女もみな役者」（『お気に召すまま』2幕7場）という卓抜な比喩が、字義どおりになってしまった。

もちろん、たとえば結婚式のような人生におけるまたとない儀式に臨んでは、自分が晴れの舞台の主役であるのは自然だ。しかし、それは日常ではないし、また逆に特別な機会だからこそ意味があるのである。

現代はハレとケの区別の希薄な、つまり日々がハレとなることを求める世界だ。甘草は甘く黄連もまた甘し。

中学2年生以降、カタギだったことが一日もないと自ら述べる作家、安部謙二（2009）によれば、「今から60年以上前のその頃は、カタギと、カタギでない人の境目が、はっきりしていました」（p.100）。役者、芸人、棋士、相撲取り、競馬の騎手、他のプロスポーツ選手も総じて、カタギには分類されていなかった。「尾上菊五郎でも升田幸三でも、双葉山でも藤山一郎でもみんな、カタギの世界の人ではない、特殊な職業の人たちという括りでした。僕は、そのことが、いいとか悪いとか言っているのではありません。…これはその頃のカタギに分類される人たちの、常識でした」（p.101）。ちなみに、「昭和50年頃までは…自民党の政治家はみんなカタギ扱いはされていませんでした」（p.92f.）と言っている。

カタギ（堅気）というのは、職業や生活についてまつとう、堅実であることの形容によく使うが、辞書で調べると、第一義は性格についての形容で、地道でまじめというものだ。第二義が職業や生活についてで、第三には、型にはまって堅い感じのするさまとある。

現代においては、堅気というのはどうも歓迎されないようだ。真面目であるという評は、若い人にとっては、褒め言葉とはならず、むしろ、創造性がなく面白味がないくらいの意味で、下手をすると悪口になりかねない。

日常生活をカタギでない、つまり型を脱した躍動する世界に脚色するための自己劇化が過ぎれば、次のような事件も生じるだろう。

今年（2010年）の4月15日付の新聞に大学生の狂言強盗が報じられていた。大学4年生の男性が、交際中の女性から別れ話を切り出されたため、関係を修復すべく、ある事件を計画立案する。

まず幼馴染の友人に協力を仰ぎ、彼女宅に強盗を装って押し入ってもらう。そこに自分が駆けつけてカッコよく窮地の彼女を救出し、惚れなおしてもらうというシナリオであった。無法の悪漢、囚われの美女、救済する英雄といったflat characterから成るペルセウス型神話をそこに見ることは容易だ。

『ロミオとジュリエット』でも、ロミオとジュリエットを結びつけようと、さかしらなローレンス神父が月下氷人よろしく一芝居、画策する。（『ロミオとジュリエット』自体が劇なので、その一芝居は劇中劇である。シェークスピア劇では、『ハムレット』をその典型とするが、劇中劇が重要な構成要素であり、それが（劇中の）現実を変えるように作用する。これはまた、入れ子構造的にシェークスピアの劇が観客の現実に作用することが意図されているのだろう。）

報道された事件では、アンハッピーエンディングの喜劇的茶番に終わった。一緒に逮捕された幼馴染の友人は、善意に満ちた神父役としてひと肌脱ぐつもりが、横縞模様の服を身に纏うことになりかねない仕儀となった（執行猶予となつたのかもしれないが）。

もしかすると、本人の潜在意識には、ローレンス神父よりも子どもの頃に読んだ童話『泣いた赤鬼』に出てくる青鬼のキャラがあったのかもしれない。

さて、どんな「キャラ」で接したら良いのか分からないというクライエントは、同様の心理をしばしば、「立ち位置が分からない」とも表現する。立ち位置とは、役者が舞台のカミテ、シモテ、センターなどどこに立つかを意味するのが元来だろう。

TVゲームにおけるキャラという言葉が、社会に浸透するとともに、ゲーム用語であった「経験値」も広く使用されるようになり、経験の事を経験値と呼ぶ逆転現象が見受けられるようになった。自分をペット育成ゲームのペットに擬えて、今、何某（その人自身の名前）育成中ですと、述べるクライエントもいる。

③ actor としての flat character と reactor としての flat character

自己構造が flat character の集合体であるのは、来談するクライエントに限られているのではなく、近年の青年に通有している。

ただ、一見したところ適応的なひとは、手持ちのキャラがいくつかあって、ここではこのキャラ、ここではこっちのキャラとトランプのカードを切るよう上手く使い分けているようである。同性の友人の前では自立したキャリア志向の大人の女性を演じ、彼氏に対しては子どものように一方的に甘えるといった風である。

俳優よろしく状況に応じて自分のキャラを上手に演じ分ける（ただ、いわゆる演じるという意識とは少し違うだろう）。もちろん、このキャラはきわめて一面的な flat character である。

みながそれぞれ、flat character を上手に演じ分けることによって集団の凝集性は保たれ、場は和み、会話は円滑に流れる。

女性などでは、グループへの新規参入に際して、メンバーを見渡して、グループに欠けているキャラ、たとえば、しっかりお姉さんキャラ、甘えんぽキャラ、ぼけキャラを補充することで、自分の役どころ＝居場所を確保する。

自己不確実感を抱いて来談する学生と適応的な学生の違いは、actor（行為者＝役者）として flat character を能動的に選択し演じるのか、受動的に reactor（反応者）としての flat character に直面させられるかの相違であるようだ。

reactor としての側面が強くなると、相手が自分にたいして持つと想定されるキャラ、相手が自分に對してつくった一面的イメージに、受け身的に同一化する苦痛が生じる。

あるいは、T.P.O に応じて flat character を種々演じわけるなかで主導感が失われ、相違する flat character を「集合体」として漠然と包摂していた自己感覚が損なわれる。

たとえば、あるクライエントはこう述べる。どれも本当なんだろうけど、しっかりキャラに甘えんぽキャラ、陰気に陽気、勝気に弱気、クールにホット、無口に多弁、違うにしてもあまりにも両極端で違すぎる。人によって相手の抱く自分へのイメージも

まるでバラバラ、素の自分でなんだろう。ジョハリの4つの窓というのを心理学の授業で習ったが、自分は知っているけれど他人は知らない、「隠された自己」なんて、私にあるのかな。自分が「ほんとうは」どう感じているのかというのが分らない。

flat character は必ずしも偽というわけではなく、断片であるとはいって、その都度、真である。あるいはダグラスの言い方を借用すれば、どれも「ウソではないかもしないが、しかしけつして真実ではない」。一断片であるという点において、全範囲（round）からすれば、いづれも偏頗であるのだが、flat character のあいだにおいては真偽の位相差に乏しい。したがって、どちらが本当の自己なのかという問いにはそもそも正確に答えることができない。

flat character の変転について自己愛との関連から述べておこう。自己愛的人格のひとにあっては、自己イメージは些細な出来事に応じて「なんでもできる万能的な自己」から「なんにもできない無力な自己」、あるいはその逆へと容易に転じる。何でもできるわけではないけれど、何もできないわけではないといった中庸を得ることがない。もちろん、自己イメージの反転にともなって気分の変動が生じる（双極性障礙のII型を見逃してしまう危険性には留意が必要だが、青年期の短期間の気分変動は、こうした自己愛に関する自己イメージの反転から生じことが多いように思う）。

そうしたひとは、相手の持っている自分へのイメージを壊してはいけない、と言う。しかも、既存のイメージから逸脱することが、一種の背信行為であり反倫理的であるかのような口吻である。

陽気で明るいはずの自分が悩んでいる姿は、友人にはぜったい見せられないという。場合によっては、親にも相談できない、自分は悩むようなキャラではないと親は思っているから、と語る。

④ 集団力動における flat character

また、flat character であるべしという集団圧力も強いようだ。ある関係では、ある固定したいつもの flat character で応じるべし、それがそれにかなうこと、とでもいう具合だ。

自分の意外な側面を仄めかすのは疎まれる。たとえば、これでも結構泣き虫なんだよ、などと裏の面を仄めかしても、またまた、と軽くいなされて、相手にとってお馴染みの型にはめられてしまう。*flat character* は、「性格の発展に気を使う必要もなく、そしていつも同じ雰囲気で登場してくれる所以たいへん便利」なのだ (Forster, 1927, 邦訳 p.100f.)。

初対面のひとでも、A型、B型、O型、AB型、相手の血液型さえ知れば、その人の性格が分ったように妄想できるから安心だ。血液型性格占いが大人気なわけである。むろん、A型なのにO型みたいだね、といった理解もあるが、その認識様式はお仕着せの*flat character* から一步も出るものではない。

適応的な学生の自己も不適応的な学生の自己も、ともに*round character* というよりも*flat character* の集合体として機能している点は類似しており、*flat character* 間の転移構造による適応ー不適応の懸隔は、神経症的心理構造に基づくそれよりも小さい。つまり、*flat character* 間の転換不調は生じやすいと言える。

それというのも、*round character* も、もとより開放システムに相違ないが、相対的に *round character* が自律的で自己完結的であるのに対し、*flat character* の集合体はより状況依存的で、システムの開放度が高いからである。*round character* は、閉じられた個人(homo clauses)として表象しやすいのに対して、*flat character* の集合体は関係性との関数によって、どの*flat character* が前景化するかが決まる。

少し極端にいえば、アトム的個我として表象されるような自己があつてそれが集団に帰属するというより、まず帰属集団内の関係性があつて、その結ばれとして自己が成形されてくるとでもいった感がある（実は、Minkowski (1936/1967) が「相互性における自己と他者はたつたひとりの私よりも本源的」であると述べるように、現代青年に限らず、人間存在の本質においては関係が個に先んじている。ただ、こうした基層の露出は原初的ありようと言える）。

現代青年の対人関係が流動的で、いじめにおいて

もいじめられ役が容易に変転しやすい現象はつとに指摘されているところだが、その基盤のひとつには自己構造の時代的変化があつて、自分が *round character* というよりも、*flat character* の集合体として活動している面があるからだろう。そしていじめの程度が急速に激化しやすいのも、いじめる側、いじめられる側の双方が *flat character* として対するからであろう。

flat character の集合体としての自己構造は、状況つまり関係性に依存しているため、所属集団の変更是、容易に自己構造そのものに変化を呼び込む契機、さらには危機となりがちだ。したがって、いまの大学生にとっては、「所属グループ」なるものが自己を支える地盤として予想以上に重要な役割を果たしている。

心理療法について論じることは予定にないのだが、ミニマムの集団の一員として、少しだけ言及しておこう。*round character* のひとに対しては、ロジャリアン的な共感的理解が比較的容易なのだが、*flat character* のひとでは、それが難しくなる。自己構造が *flat character* の集合体である場合、治療者は、Sandler (1976) が役割対応性(role-responsiveness)として言及したような状況に誘導されがちだ。クライエントに内在する *flat character* 間のある関係（自己と内的対象との関係、たとえば加害ー被害関係）が、クライエントと治療者によって実演される事態がまま生じる。

こうしたクライエントに複数の援助者がかかるれば、ある援助者にはよき理解者の役が、あるひとには憎まれ役が振り当たられ、スタッフ間での分裂が生じやすい。

4. *flat* な社会

ひとつの *flat character* から他の *flat character* へと跳び移ってゆくのは、現代社会において適応上、都合が良いからだろう、と先に述べた。それは、現代青年が楽をしているという意味ではない。むしろ、そなならざるを得ない社会的状況に投げ込まれていることに思いを致すべきである。

ここで若干、各人の自己構造をして *flat character*

の集合体ならしめている社会的背景を考えてみよう。

といつても、現代社会の総合的論評をするだけの力量もないので、大まかな点を抑えたあとに、社会のflat化、画一化、一面化に焦点を当ててみる。

ニーチェは『力への意志』で、「真理とは、それなくしてはある種の生き物が生きられないような誤謬のことである」と述べた。彼は1900年にこの世を去ったが、ざっと百年を経て、ニーチェに端を発するポストモダン的意識が無自覚ながら世間一般で共有のものとなつたように思われる。それにともなって、社会問題に解決をもたらす正答と目されたイデオロギーというのも、20世紀とともに滅んだ感がある。

もとから真理がないのだから虚偽もない。所詮、何事も相対にすぎない。道徳的判断についても、「善も悪もない、結局は考え方次第だからな」(2幕2場ハムレットの台詞)となる。これではなにか特定の固定のものにコミットするわけにはゆかない。そんなものは足枷にこそなれ、身軽に世を渡るには役立たない。

重要なのは、手段や過程の如何によらず、人目を引く実効のみということになる。これは安直な結果主義を招く。

しかも、この実効を生み出す最たるもの、現代社会では情報である。情報社会とは情報機器というモノに囲まれた社会の謂いではない。モノならぬ無形のコトである情報自体が、ひとの思考や行動を左右する社会のことだ。

かつての情報は実体に附属する影のようなものであった。しかし現代では、情報が事実を創造する。事実無根であったとしても、つぎはあの生命保険会社が倒産しそうだといううわさが広まれば、契約の解約が相次ぎ、事実、その会社は倒産の憂き目にあう。あるいはまた、現在の収支決算が赤字でも、今後発展する見込みアリ、という期待感(あるいは誤認)が共有されれば、その企業の株価は上昇しつづける。さらには、実現する意図などさらさらないのに巨大プロジェクトを発表して株価を操作することもできなくはない。生ける仲達を走らせるには、死せる孔明で十分だ。生き身の孔明がいるに越したこ

とはいが、三顧の礼で迎えるのも骨折りなので、勢い、張り子で済ませることになる。裸の王様は、裸のままで絶賛のうちに華麗なるパレードを終える。

現代では情報から情報が生まれ、その情報が商品となる。たとえば、ある検索サイトで不特定多数のひとが、某大学について色々なキーワードで検索する。あるいは別のサイトからその大学のホームページを訪れる。検索サイトを運営している会社は、検索のされ方から、この大学について世間ではこういう点に注目している、こんなイメージをもっている等という情報を得る、というか製造する。こうした情報検索行動についての情報が商品となる(個人情報そのものを売ることは、むろん法律上禁止されているが、統計的に処理された二次情報や三次情報は構わないし、実はこちらの方が、商品価値が高い)。

以上、相対主義や結果主義、情報化社会について述べたが、よく言われる多様化の時代というのは眉づばであろう。むしろ、情報化と連動して、社会はflatに、つまり画一的になっている。こんなことを言えば、それは異なることを言う、今は多様化の時代、これぞ常識、という反論が聞こえてきそうだ。

しかし、筆者と同じ意見のひともある。セブン・イレブンジャパンの創始者、鈴木敏文だ。鈴木は、多様化の時代と言うのは「本当のようなウソ」だという。商売という実践的行為を通じて世間とかかわることから見えてくる実像がある(勝見, 2006, p.47)。

今は“多様化の時代だ、多様化の時代だ”と、口を開けば誰もがしたり顔で話します。ニーズの多様化、嗜好の多様化、ファッションの多様化……等々、それがあたりまえであるかのように言われる。しかし、本当にそうなのでしょうか。今の日本のどこが多様化なのでしょうか。私にはとてもそうは見えません。誰かが文学的に“多様化”という耳当たりのいい言葉を使ったから、みんな多様化、多様化と言っているのであって、私が商売を通じて見る日本人の姿は、明らかに“画一化の時代”です。しかも、

その傾向は、ますます強まっている。商品のライフサイクルがどんどん短くなり、次から次へと新しい商品や流行が出ては消えるから、一定のスパンの中で立体的に見ると、多様化のように見えるだけであって、ある時点を捉えると画一化以外の何ものでもない。みんなが同じ商品に殺到する。なぜ、みんなが同じブランドを持つのでしょうか。なぜ、女子高生はみんなルーズソックスをはくのでしょうか。日本ほど画一化的国はありません。

次から次へと脈絡なく押し寄せる流行に身を合わせてゆく姿勢と、あるひとつの flat character から他の flat character へと次々に転換してゆく自己構造とは相似形である。

物事への理解も単純平明、分りやすいのが一番で、複雑なことも委細構わず単純化できると決めてかかり、最後の結論だけを分りやすく図式的に解説しろと強要する。

企業で言えば、その最たるもののが企画書だ。提出される企画書は、現場を知らない上司が理解しうるものである必要があり、くわえて、その上司がさらに上の上司に対して説明できる分りやすさを備えていなければならない。

不登校児には、登校刺激をした方が良いのか、しない方が良いのか。質問がいかに無茶であるかに気がつかない。二つの平面 (flat) が 45 度の角度で交差しているとして、どっちの平面が上で、どっちが下? と尋ねると同断である。しかし、質問者は 45 度の角度で交差しているという答えには承知しない。平面はつねに単純な平行関係にあって、どちらかが上でどちらかが下であると思っているらしい。

現代では、次から次に新しい情報を処理してゆかなくては済まされないから、一つの物事に時間をかけていられない。そのくせ物事は複雑化する一方で、理解するには骨が折れる。だから単純化して欲しい。そこに物事を一方向からしか捉えられず、かてて加えて部分を全体と妄想できる人物が登場する。得てして、そうした人の物言いは自信満々の大声で、思

慮分別のある人よりよほど景気がよい。不景気の時代には、そんな人物が大向こうをうならせる。

主人公たる自分以外の人や物は flat な存在と化す。そして相互に他者を平板化するなかにあって、各自の自己は flat な存在となってゆかざるを得ない。flat character の断片から断片へと能動的に飛び石するのか、あるいは受け身的に追い回されるかするうちに、こうした事態を自覚する暇も与えられず、その苦痛を苦痛と感じるほどの神経すら麻痺してゆく。

場合によっては反動が生じることもあるだろう。平板に横ばいしてゆく退屈な日常的現実から、解放されようと異界的平面へ跳びあがろうと足搔く。しかし、そこにもボヴァリズムあるいはドンキホーテ的演技はつきもので、異界は気散じにはなるものの、つまるところ、それもまた毛色の違った断片的平面にすぎない。断片の集合は、けっして全体とはならない。

5. おわりに

心理学は物理学などとは違い、時代や地域に応じて変化せざるを得ない。むろん物理学にも時代精神は反映し、時代特有のパラダイムが新規の創造を拘束する。やがて新知見が旧知見を包摶しながら、新たなモデルが創出されてゆく。

しかし、心理学では認識様式ではなく、認識対象であるこころの動き自体が世につれて変化する。したがって、ようやくある心理力動の定式化ができたと思った頃にはもうすでに、その定式化では処しえない別の動向が生じている。イタチごっこのようでもある。

本論では、どんなキャラで接したら良いのか分らないという学生の訴えを議論の端緒とした。その新奇性は、単なる言いまわしのうえだけのものではなく、より根本的な自己構造にあるのではないかということで、フォースターの flat character と round character の概念を援用し、青年の自己構造を flat character の集合体として把握した。そこにおいては、抑圧よりも軽微なスプリッティングが優勢であり、内面の葛藤を解決するというより flat character をいかに円滑に切換えるかが問題となっている。

むろん、flat character という視点から、現代青年のこころの現象があらかた理解できるなどと考えているわけではない。むしろどんな視点にせよ、クライエントの立体的実像を一面的に、あるいは平板にしてしまうものは望ましくないと考える。

心理カウンセラーも、上述の平板化愛好の時代精神のなかに生きている。カウンセラーのクライエント理解が平板化しないとも限らない。しかしである。

「スルメを見てイカがわかるか」、これは養老孟司の言葉だが、けだし至言であろう。

カウンセラーが、生きたクライエントを既存のモデルに当てはめて性急に熨してしまうならば、そのカウンセリングはまさに flat character 同志の関係となり、表面上は円滑なようでいて、いっこうに深まってゆかないであろう。

そもそも、カフカ、F. に言わせれば、「心理学とは短気の謂いである」(邦訳 p.43)。心理学にはつねに、生きたひとりの人間を熨斗クライエントに変えてしまう危険性がある。

安直に全人的といった言葉を使用することにはいささか胡散臭さを感じるのだが、hale (元気な)、heal (癒す)、health (健康な) が、語源的に whole (全体の) と同系であることは注目に値する。複雑なものを複雑なままに割り切らず、全貌を知り得ていないことを自覚しつつ、丹念に現象につき従うべきだろう。

もっとも、そうした round 志向自体、旧時代の精神的遺物にすぎない、完全無欠の holy な超越存在を妄念した時代の残滓なのだ。そんなことでは、合理化・効率化の現代社会を生き抜けないと、ニーチェの末裔たちに言わわれれば、口をつぐまざるを得ない。

<引用・参考文献>

安部謙二 (2009). 『絶滅危惧種の遺言』(講談社)

Forster, E.M. (1927). *Aspects of the novel*.

London: Edward Arnold. 中野康司訳

1994 『小説の諸相』(みすず書房)

勝見明 (2006). 『鈴木敏文の“統計心理学”』(日本経済新聞社)

Minkowski, E. (1936/1967). *Vers une cosmologie, fragments philosophiques* (nouvelle édition). Paris: Aubier-Montaigne. 中村雄二郎・松本小四郎訳 1983 『精神のコスモロジー』(人文書院)

Sandler, J. (1976). Countertransference and role-responsiveness. *International Review of Psycho-Analysis*, 3, 43–47.

辻理 編訳 (1996). 『カフカ：実存と人生』(白水社)